

【報道関係各位】

2010年6月

ポーラ美術館 展覧会案内

HENRI ROUSSEAU UNDER PARIS SKIES

アンリ・ルソー

パリの空の下で

ルソーとその仲間たち

2010年9月11日 [土] ~ 2011年3月13日 [日]



アンリ・ルソー (エッフェル塔とトロカデロ宮殿の眺望) 1896-1898年 油彩/カンヴァス 49.7×65.5cm ポーラ美術館

【報道に関するお問い合わせは】ポーラ美術館 広報事務局 担当: 増田、小椋、三井 TEL 03-3575-9823 / FAX 03-3574-0316

歿後 100 年を記念して、 国内最大のルソー・コレクションを初めて一挙公開！

ポーラ美術館（神奈川県箱根町）は、2010年9月11日（土）から2011年3月13日（日）まで、『アンリ・ルソー：パリの空の下で ルソーとその仲間たち』を開催します。

不思議な魅力で観るものを惹きつけてやまない異色の画家アンリ・ルソー（Henri Rousseau 1844-1910）の作品は、ポーラ美術館のコレクションのなかで特別な位置を占め、充実した内容を誇ります。2010年9月より画家の歿後100年を記念して、当館が収蔵するルソー作品と、国内で所蔵されている選りすぐりの作品を合わせ、計16点を展観し、ルソーが描き出したパリとその近郊にみる近代的風景、熱帯のジャングルをモチーフにした夢幻の世界を探究します。また、ルソーの才能をいち早く評価し、老画家を敬愛したピカソをはじめとするモンマルトルの前衛画家たち、ルソーの系譜をひく素朴派の画家ポーシャン、ボテロ、そしてルソーを「偉大な世紀の芸術家」と讃えた日本の洋画家の岡鹿之助を紹介します。

本展覧会では、第1章「ルソーのパリ 世紀末都市のパノラマ」、第2章「ゴーガンとルソー 熱帯への憧憬」、第3章「ルソーの夜会とモンマルトルの画家たち」、第4章「ポーシャンとボテロ 絵画における素朴」、第5章「岡鹿之助 日本とルソー」の5つのセクションから構成されます。また世田谷美術館所蔵のルソー作《フリユマンズ・ビッシュの肖像》など国内の所蔵作品を含め、43点の油彩画と、水彩画・鉛筆画など約6点の合計約50点のルソーとその芸術に触発された画家たちの作品を一同に展覧します。いまだ知られざる20世紀絵画の先駆者ルソーの多彩な魅力に迫るまたとない機会といえるでしょう。



アンリ・ルソー 〈ライオンがいるジャングル〉
1904年 油彩/カンヴァス 37.7×45.9cm ポーラ美術館



アンリ・ルソー 〈フリユマンズ・ビッシュの肖像〉
1893年頃 油彩/カンヴァス 92.0×73.0cm 世田谷美術館

本展の見どころ



1. 歿後100年を記念し、

国内最大のルソー・コレクションを初めて一挙公開

パリの入市税徴収官として働きながら、40歳の頃に本格的に絵画に取り組み始めたルソー。遅咲きの画家ルソーの現存する絵画は、世界でわずか二百数十点。日本でもルソーの人気は高く、二十数点が国内で愛蔵されています。ポーラ美術館はルソー作品8点を収蔵し、日本最大のコレクションを誇ります。

本展では、アンリ・ルソー歿後100年を記念し、国内に所蔵される選りすぐりのルソー作品とともに初めて一挙公開します。



2. ルソーはジャングルだけじゃない！

ルソーが描いたパリの空を、新しい視点でクローズ・アップ

鬱蒼とした熱帯の密林、草むらに潜む野獣たち…。

ルソーの絵画といえば、まずはジャングルの風景が思い起こされます。

その一方で、パリに暮らして勤務中もつねにパリの街を見つめたルソーは、ジャングルの風景よりも、さらに多くのパリとその近郊の風景画を描いています。そこに写し取られているのは、世紀の変わり目に変貌を遂げようとする都市の風景 エッフェル塔や工場の煙突が空を高くつらぬき、開発されてまもない飛行機や飛行船が、詩情豊かな雲とともに浮かぶ、新時代の魅惑的な空の展望です。

ルソーがパリとその空にそそいだ新鮮なまなざしに注目します。



3. 印象派の画家と同世代・20世紀絵画の先駆者ルソーからはじまる

もうひとつの絵画の流れ～ピカソ、素朴派、日本

ポーラ美術館のフランス絵画のコレクションは、印象派だけではなくありません。ルソーはモネ、ルノワールら印象派の画家たちと同じく1840年代生まれ。

しかしルソーを評価し敬愛した「ルソーの仲間たち」は、20世紀初頭の若きモンマルトルの前衛芸術家たちでした。ピカソ、ブラック、ローランサン、詩人のアポリネールらは老画家ルソーと親交を結び、ルソーの独自性あふれる絵画に触発されました。ルソーは20世紀絵画の先駆者のひとりなのです。

ルソーの歿後も彼に連なる自由な発想の個性的な画家として、ポーシャンら素朴派と呼ばれる独学の画家たち、ルソーの絵画に学んだレオナール・フジタ（藤田嗣治）や岡鹿之助など多くの日本人画家を挙げるすることができます。

各章の概要

【第1章】ルソーのパリ 世紀末都市のパノラマ

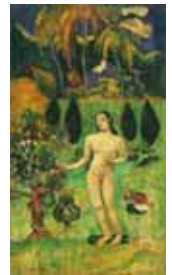
ルソーの風景画には、技術革新の産物である鉄橋や高架橋、パリ万博を機に建設されたエッフェル塔、空には新世紀の到来を告げる飛行船やライト型飛行機が、華々しく登場します。異国の文明を紹介する万博会場が設置された世紀末のパリは、あらゆる時代と空間が混在する、巨大なコラージュ・シティの様相を呈していました。ルソーはその複雑な現実を、伝統的な画題にとらわれることなくユニークな視点で描きました。ルソーがとらえたパリのさまざまな風景に、画家のまなざしを探ります。



アンリ・ルソー 〈エッフェル塔とトロカデロ宮殿の眺望〉 1896-1898年 油彩/カンヴァス 49.7×65.5cm ポーラ美術館

【第2章】ゴーガンとルソー 熱帯への憧憬

熱帯の色彩、濃密な空気、未知なる動植物と人間の生態に惹きつけられたふたりのフランス人画家、ゴーガンとルソーは、ともにパリでの生活を基盤にしつつも、絵筆を手に異世界への飛躍を果たした画家でした。かたや世界中を旅したゴーガンの〈異国のエヴァ〉と、国外へ一歩も出ることがなかったルソーの〈エデンの園のエヴァ〉。それぞれの作品には、どのような意識が沈潜しているのか、彼らが抱いた熱帯への憧憬を浮き彫りにします。



ポール・ゴーガン 〈異国のエヴァ〉
1890/1894年 水彩/紙 42.8×25.1cm(画面) ポーラ美術館

【第3章】ルソーの夜会とモンマルトルの画家たち

1908年、モンマルトルのピカソのアトリエ兼住宅「バトー = ラヴォワール」(洗濯船)で、「ルソーを講べる夜会」と呼ばれる芸術家たちの夕べが開かれました。晩年のルソーに賞賛を捧げた若き前衛画家たち、ピカソ、ブラック、ローランソンの絵画に、ルソーと共通する同時代性と革新性を探ります。またルソーは、郊外の風景を画題として見出した先駆者でもありました。レオナール・フジタ(藤田嗣治)はルソー作品に触発され、パリの下町の風景や貧しい生活者を繰り返し描いています。ユトリロもまたモンマルトルの街路に愛着を抱いた代表的な画家の一人です。ルソーの精神的な仲間といえる彼らの作品から、大都市のもうひとつの顔を見つめます。



パブロ・ピカソ 〈男の胸像〉
1909年 油彩/カンヴァス 65.8×42.2cm ポーラ美術館
©2010-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)

【第4章】ポーシャンとボテロ 絵画における素朴



「素朴」であること、「自然」にならうことを自身の美德としたルソー亡き後も、「素朴」の名のもとに独自の画風でおのおの世界を表現する画家たちが現れます。庭師の仕事のかたわら植物の楽園ともいえる空間を構築したポーシャンと、幸福感に満ち溢れたふくよかな人間像を創造したボテロの作品から、絵画における「素朴」について考察します。

アンドレ・ポーシャン 〈洞窟の入口〉 1928年 油彩/カンヴァス 64.8×54.2cm ポーラ美術館
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010

【第5章】岡鹿之助 日本とルソー



岡鹿之助 〈擬画〉 1927年 油彩/カンヴァス 80.7×100.2cm ポーラ美術館

ポーラ美術館のコレクションを築いたポーラ・オルビスグループの前オーナー鈴木常司(1930-2000)は、日本におけるすぐれたルソーの紹介者である岡鹿之助との交流からルソーの世界に夢中になり、8点の作品を収集したルソー・コレクターでした。岡鹿之助はルソーの絵画技法を研究し、ルソーとは何者か、という謎に絵画制作のなかで迫った重要な画家です。ルソーへのオマージュともいえる岡が描いた風景画と静物画から、日本におけるルソーの存在について問います。

アンリ・ルソーってどんな人？ルソーを知る3つのエピソード

・独学、アンデパンダン（独立）の画家ルソー

ルソーは1844年、パリから250キロ西にあるラヴァル市にブリキ屋と不動産業を営む家に生まれました。勉強が苦手で、16歳の頃に退学。普仏戦争後、パリ市の入市税関に就職し、1893年まで22年間勤め続けます。独学で絵筆を取り、本格的に絵画に取り組んだのは40歳の頃。新印象主義のシニャックやスーラなど新しい傾向の画家に発表の場を与え無審査・無賞を旨とする「サロン・デ・ザンデパンダン」の理念に共鳴し、1886年以降生涯にわたり揶揄と嘲笑を受けながらもほぼ毎年出品を続けました。



アンリ・ルソー（ムーラン・ダルフール）1895年頃 油絵/カンヴァス 37.8x45.5 cm ポーラ美術館

・「素朴」で一途な情熱家ルソー

画家としての名声と、女性の愛を生涯一途に追い求めた情熱家…肖像画を描く時は、モデルの全身を真面目に定規で測った…幽霊の存在を本気で信じていた…画家ルソーの人柄を伝えるエピソードはさまざまにあります。天真爛漫で信じやすくだまされやすいルソーは、64歳のときには詐欺事件の共犯者として逮捕されるまでに。裁判で潔白を訴え幸いにも釈放されました。苦勞人ルソーは幸せな家庭生活に恵まれませんでした。7人の子どものうちの5人が夭折し、最初の妻クレマンスは1888年に結核で亡くなります。その悲しみから立ち直るために、ルソーは絵画に没頭し始めたといわれます。晩年まで貧困に悩まされながら絵画に身を捧げたルソー。誠実で一途な性格がしのべられます。

・音楽家ルソー

子どもの頃から音楽と図画が得意だったルソー。ヴァイオリン、フルート、クラリネットを演奏し、楽団に所属する他、音楽の個人レッスンも行っていました。自ら作曲を手がけ、愛妻クレマン스에捧げたワルツ『クレマンス』の楽譜も出版しています。音楽の腕前を披露するのは、自宅や友人宅で開かれた夜会の席。最晩年にルソーが自宅ではほぼ月に一度開いていた夜会では、近所の住民やアポリネール、ピカソら文学者や前衛芸術家が招かれ、ルソーと客人が音楽や詩の朗読を披露する多彩なプログラムが人気でした。本展では、ルソーが作曲したワルツ『クレマンス』や、アポリネールによる詩の朗読を聴くことができます。



挿絵: ジョルジュ・ブラック
ギヨーム・アポリネール 『彼方でぼくが死んだら』
1962年刊 木版/紙 433×31.4cm(画面) ポーラ美術館
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010



マリー・ローランサン
『風景のなかの二人の女』
1926年頃 油彩/カンヴァス
60.9×50.0cm ポーラ美術館
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010

【関連イベント】

ルソー研究の第一人者である岡谷公二氏による歿後100年記念講演会を開催。(2011年3月6日)

ルソーとその仲間たち

ルソーの魅力的な人柄と芸術に惹かれ、モンマルトルの若き画家、詩人、批評家たちは、世代を超えてルソーと親しく交流しました。本展覧会では、ルソーと同時代を生きた親友の芸術家たち、そしてルソーの歿後にその芸術の系譜を継いだ素朴画家と日本人画家を「ルソーの仲間たち」として紹介します。

1893-1894

・ポール・ゴーガン
1848-1903

ポスト印象派の画家。ブルターニュ、アルルなどフランスの地方で制作するが、南洋に憧れ、タヒチに滞在して異国風景を発表。1883年に最初のタヒチ滞在から帰国した頃にパリでルソーに数度会う。ルソー作品の黒色を評価。

・アルフレッド・ジャリ
1873-1907

ルソーと同郷の文筆家。戯曲『ユビュ王』の作者、『フォーストロール博士言行録』にルソーが登場する。

・ロベール・ドロネ
1885-1941

ルソーの親友。「キュビズムの画家」に加わり、のちに「オルフィスム」(1912年)を創始。

出品作家

出品なし

親交



アンリ・ルソー

1844-1910

1908 ルソーを讃える夜会

20世紀初頭のモンマルトルの芸術家とキュビズム

・パブロ・ピカソ
1881-1973

ルソーの《女の肖像》を古道具屋で偶然見つけて購入。芸術家が集ったモンマルトルのアトリエ兼住居「バトールラヴオワール」で1908年にルソーを讃える夜会を開く。ルソーの作品4点を収集し、生涯手元に置いて愛蔵した。

・ヴィルヘルム・ウーデ
1874-1947

ドイツ人画家、美術批評家。ルソーの生前唯一の個展を開催、ルソーの最良の紹介者。ピカソ、ブラックの作品も早くから高く評価。『聖なる心の画家たち』展(1928年)で、ルソーの作品とともにポーシャンを紹介。「素朴派」の画家たちの発見者。

・ギヨーム・アポリネール
1880-1918

詩人、美術批評家。ルソーにローランサンとの肖像画制作を依頼し、親友となる。ルソーに捧げた批評、詩を発表。『キュビズムの画家たち』(1913年)を著す。

・マリー・ローランサン
1885-1956

恋人アポリネールを介してルソーの作品に影響を受ける。アポリネール著『キュビズムの画家たち』では、ルソーとともに紹介される。

・ジョルジュ・ブラック
1882-1963

ピカソの親友、ライバル。1907年以降、ピカソと互いに触発されつつ「キュビズム」の実験に取り組む。

ルソーと素朴画家 1928-

・アンドレ・ポーシャン
1873-1958

苗木商を営み第一次大戦に従軍後、46歳で絵画を描きはじめる。花の静物画、植物が繁茂する庭の風景、ギリシア神話から題材をとった作品など、柔らかい色彩で楽園的空間を描いた。

・フェルナンド・ボテロ
1832-

コロンビア生まれの画家、彫刻家。独学で絵画を学んだのち、スペイン、イタリアの美術学校に通う。素朴な幸福感に満ちたふくよかな人物像を生み出し、存在感あふれる人間像を追究。

・モーリス・コトリロ
1883-1955

モデルで画家の母親のすすめで、独学でモンマルトルの街やパリ郊外の風景を描く。ルソー主催の夜会に出席。

・レオナルド・フジタ
(藤田嗣治) 1886-1968

1913年に初めて渡仏。ピカソのアトリエでルソーの《女の肖像》を見て衝撃を受け、独自の画風を追究することを決意。1910年代末にルソーに影響を受けたパリの風景画を制作。

ルソーと日本人画家 1910-20年代

・岡鹿之助
1898-1978

1924年に渡仏。在パリの先輩画家フジタの教えを受ける。パリの画廊でルソー作品に学ぶ。1939年に帰国し、戦後、ルソーについて雑誌、画集に多くの文章を執筆し、ルソー芸術の紹介に貢献した。

飛行機・飛行船・雲 ルソーが見上げた空に浮かぶもの

ルソーが描いた空には、飛行機、飛行船、気球といった新時代の幕開けを象徴するさまざまなものが浮遊しています。当時のパリの空は、近代化を象徴する最先端技術の発表の舞台となっていました。大空を駆け抜けた最新型の飛行機、雲のごとく悠然と航行する飛行船「レピュブリック号」、気象観測実験の気球など、新奇な飛行物体が次々と登場します。20世紀に入るまで未開の領域であった空は、航空機の開発が過熱し、気象学が急速に進歩するなかで、人類が地球上の四大陸と七つの海の次に征服すべき、到達可能な空間へと変貌しました。ルソーはパリの空を仰ぎ眺め、未開地ジャングルへ注いだ好奇のまなざしと同じ情熱をもって、同時代が見出した未開の領域、空の新しい様相を開拓し、漂う雲に夢想をさそう詩情を紡ぎだしています。

飛行船・飛行機

《飛行船「レピュブリック号」とライト飛行機のある風景》

1909年 油彩/カンヴァス 598×73.1cm ポーラ美術館



世界初の飛行機を発明したライト兄弟の兄ウィルバー・ライト（1867-1912）は1908年にフランスに渡り、ライト型飛行機で連日記録更新に挑み、米仏間の激しい記録競争が火蓋を切りました。ルソーがこの作品の空に描いた飛行機は、この記録競争に勝利したライト型飛行機で、複葉機の骨格が忠実に描かれています。新大陸アメリカの航空技術の優勢を示すライト型飛行機に並置されているのは、フランスが威信にかけて開発した軍用飛行船「レピュブリック号」（共和国号）です。夕陽に染まる茜雲のたなびく空のなかに、飛行技術へのオマージュともいべき光景を創り上げています。

雲

《シャラントン＝ル＝ボン》

1905-1910年頃 油彩/カンヴァス 32.5×40.8cm ポーラ美術館

ルソーはパリの南東部に新たに発展した郊外の町シャラントンで、詩情あふれる雲の表情を描いています。河岸の上空には飛天のように赤みを帯びて舞う雲、鉄道橋にそって立ち膨らもうとする低い雲、もしくはすでに通り過ぎて姿の見えなくなった機関車の残した蒸気が漂います。河岸にはひとり、ピクニックに訪れたルソー自身を思わせる人物が、工場の煙突などがひしめき合う大都市を遠くに眺め、雲が浮かぶ空の下で雄大なパノラマを見上げています。



【関連イベント】

空を巧みに描いたルソーにちなみ、『空の名前』の著者で空の写真家として有名な高橋健司氏による講演を予定。(2010年10月10日)

企画展関連開催イベント

講演会「アンリ・ルソー：パリの空の下で」

【日程】 2010年11月21日(日) 14:00~15:30

【会場】 ポーラ美術館講堂

【講師】 今井敬子(本展担当学芸員)

聴講無料(ただし要入館料) 先着100名様まで

歿後100年記念講演会「アンリ・ルソーの偉大さ」

【日程】 2011年3月6日(日) 14:00~15:30

【会場】 ポーラ美術館講堂

【講師】 岡谷公二(跡見学園女子大学名誉教授)

聴講無料(ただし要入館料) 先着100名様まで

担当学芸員によるギャラリートーク

展覧会の見どころを展示室でご紹介します。

【日程】 2010年10月25日(月) 12月4日(土) 2011年1月15日(土)

2月12日(土) 3月11日(金) 全5回

いずれも14:00~15:00.先着30名様まで。当日、館内の講堂にご集合。

参加無料(ただし要入館料)

+nature 自然に親しむプログラムがスタート

「箱根の自然と美術の共生」をコンセプトに周囲の環境との調和を図り森の風景の中に溶け込むようなかたちでつくられたポーラ美術館。自然に親しむプログラムを定期的に開催します。

講演会「空の名前 雲を眺め、風を読む」

空を巧みに描いたルソーにちなみ、日本の雲の風景を紹介します。

【日程】 2010年10月10日(日) 14:00~15:30

【会場】 ポーラ美術館講堂

【講師】 高橋健司(空の写真家、『空の名前』著者)

聴講無料(ただし要入館料) 先着100名様まで

自然観察イベント「箱根の“ジャングル”を“探検”しよう！」

美術館のまわりの林のなかで秋の自然を観察します。

【日程】 2010年9月26日(日)

10:00~ 11:00~ 13:00~ 14:00~ (各40分)

【講師】 上妻信夫(自然公園財団箱根支部・自然公園指導員)

【定員】 各10名

【対象】 小学4年生以上

参加無料(ただし要入館料、事前申込)

メール(event@polamuseum.or.jp)または電話(0460-84-2111)でポーラ美術館まで申込

『アンリ・ルソー：パリの空の下で ルソーとその仲間たち』 開催概要

- 展覧会名 : アンリ・ルソー：パリの空の下で ルソーとその仲間たち
Henri Rousseau Under Paris Skies
- 開催期間 : 2010年9月11日(土)～2011年3月13日(日)
- 作品点数 : 約50点(油彩画約43点、水彩画2点・鉛筆画1点・版画1点・挿絵本2点)
- 出品作家 : アンリ・ルソー、ポール・ゴーガン、パブロ・ピカソ、ジョルジュ・ブラック、
マリー・ローランサン、レオナール・フジタ(藤田嗣治)、モーリス・ユトリロ、
アンドレ・ボーション、フェルナンド・ボテロ、岡鹿之助
- 主催 : 財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館
- 会場 : ポーラ美術館 展示室1
〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285
Tel. 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108
ホームページ <http://www.polamuseum.or.jp>
- 開館時間 : 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
- 休館日 : 会期中無休
- 入館料 :

	個人	団体(15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引(65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生	700円	500円

料金はいずれも消費税込み。
中学生・小学生の入場については、土曜日は無料です。
中・小学生が授業の一環として観覧する場合、中・小学生及び引率教員等の入場は無料です。

【次回予告】

「レオナール・フジタ 私のパリ、私のアトリエ」展

【会期】2011年3月19日(土) 2011年9月4日(日) 会期中無休

【主催】財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館